ドクターKubo の社会保障論評

禁・無断転載等

社会保障論評22-025号　（作成日：2022年12月31日）

「奨学金を勧めた私、正しかったか」　朝日新聞2022年12月19日付夕刊10面

○ 「高校教員をしていた頃、教え子たちに奨学金を借りての進学を勧めていた」女性が、「奨学金によって人生の選択の幅が狭められている」と感じるようになり、教え子に奨学金を勧めた「自分のしたことは正しかったんだろうか」と悩んでいるという記事である。

○ 高校・大学と奨学金のお蔭で進学できた筆者にとっては、想像を絶する事態であるが、奨学金の返還を「延滞している人は約２９万人」という状況からすると、かつてとは大きく事情が異なっているようではある。奨学金も所詮は「借金」であることに変わりはない。

○ だが、この問題は、何のために進学するのかという基本に立ち戻って考える必要があるだろう。考慮すべきは、進学による利益と、奨学金による負担とのバランスである。前者が後者を上回るのであれば、奨学金は、単なる借金ではなく「投資」に位置付けられよう。

○ 問題は、延滞者のうち年収「300万円未満で27.41％」と、延滞理由の回答者の７割が「収入が低い」としている点にある。つまり、奨学金は、投資に見合わない状況になっているわけである。これでは、文部科学省有識者会議の返済不要の奨学金拡大は、愚策である。

○ 真に問うべきは、大学などの高等教育の意義や内容であろう。奨学金という投資によって社会全体の利益や厚生が増加するのでなければ、国民の負担増は正当化されず、むしろ社会にとって害悪にもなり得る。奨学金問題は、この視点からの検討・精査が必須だろう。

○ 経済社会は激変している。ＡＩの活用によって、事務的な仕事にも、淘汰の波が押し寄せつつある。大学卒業後に多くの若者が従事していた事務的な仕事は、消滅の危機を迎えようとしているのである。大学卒業後の低賃金は、そうした動向の反映なのかもしれない。

○ 一方で、人的な技量やサービスの価値が一層重要になるのではないかという予測もある。さらなる将来には分からないが、職人的技能の価値が再評価されてきている風潮がある。世界最古の企業は、宮大工技能を継承してきた西暦578年創業の「金剛組」なのである。

○ 時代に求められる職能は変化していく。人々も、教育機関も、その変化に対応していかなければならない。高等教育機関の重要性は変わらないが、その学習の機会は、いったん職業に従事してからでも構わない、というか変化の時代には、その方が望ましいであろう。

○ それが、生涯教育やリカレント教育の考え方である。長寿を享受できるようになって「人生百年」とされる時代、いつでも必要な時に、自身の意思で学習できる体制と、それを支える仕組みが必要であろう。奨学金は、そのための経済的支援と位置付けられるだろう。

○ こうした観点から、奨学金は、「給付」ではなく「貸付」を主体とすべきというのが、筆者の考えである。問題は返済方式であり、借入者の状況を無視して期限的に返還を求めるのではなく、借入者の収入に応じて税金の上乗せの形にすれば、生涯投資の形にかなう。

○ ＡＩの進展に対する人的サービスでは、「おもてなし」の重要性が高まるだろう。けれども、東京オリンピック・パラリンピックでは、それを食い物にする高学歴・高収入の輩が跋扈した。こうした「表なし」の連中がのさばるのでは、日本の未来は厳しい。（以上）

年金数理人 久保 知行（ご意見・ご質問は、kubonenkin@company.email.ne.jp まで）